

NEWS RELEASE (2021年9月21日) 取材依頼

世界初！口腔細菌が大腸がんの発生に関与している可能性を発見 口腔細菌検査によって大腸がんの発見やリスク診断の可能性も

報道機関 各位

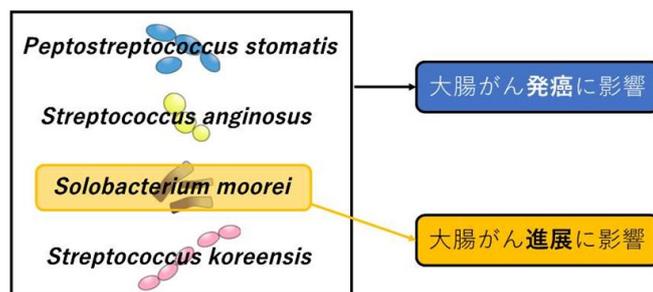
平素より本学の報道に関しては大変お世話になっております。この度、本学医歯学総合研究科の杉浦教授らの研究チームが、口腔細菌が大腸がんの発生に関与している可能性があることを発見し、2021年7月2日に国際学術誌『Cancers』に掲載されました。

鹿児島大学発の研究により新たな知見が得られたこと、また、この知見は、世界で初めて得られた知見であり、さらに、健康維持につながる重要な知見であることから、地域の皆様に成果を広くお伝えし、健康維持の参考としていただきたいと考えております。つきましては、ぜひ、取材・報道いただきますようご案内申し上げます。

【概要】

鹿児島大学顎顔面疾患制御学分野（鹿児島大学病院歯科部門口腔外科）の杉浦教授の研究チームは、鹿児島大学病院消化器外科、大阪大学微生物病研究所との共同研究により、大腸がん患者と健康な人から唾液と便のサンプルを採取し、遺伝子レベルで細菌叢解析を行いました。その結果、大腸がん患者の唾液・便サンプルに共通して存在する特異的な口腔常在菌が4種類あることを発見しました。これらの菌は、これまで大腸がんから検出されてきた *Fusobacterium* とは異なる菌種であり、初めての発見となります。

口腔常在菌の4菌種が口腔から大腸に移行し、大腸がんの発癌や進行に関わる。



【本研究成果の意義】

1. 口腔から大腸に細菌が供給されていることを証明したこと
2. 発見された口腔細菌は、大腸がんの特異的であることから、大腸がん及び発がんに関わる細菌であることが示唆されること
3. 今後、唾液の細菌叢検査をすることにより、大腸がんの発見やリスクを検知することが可能となるかもしれないこと
4. 口腔細菌叢の管理が大腸がんの予防につながる可能性があることを突き止めたこと

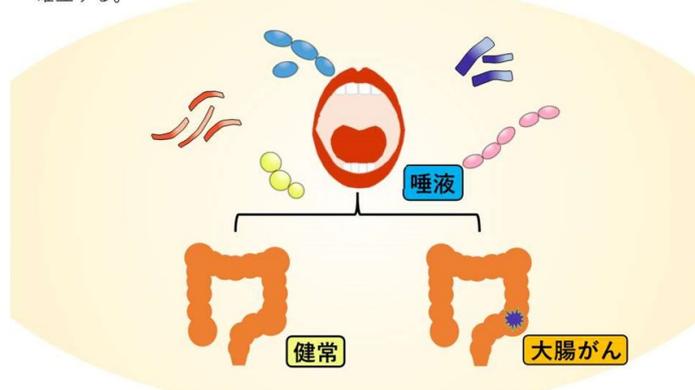
【今後の展望】

唾液を用いた口腔細菌叢解析による大腸がん診断法および大腸がんリスク診断法の開発については、現在進行中です。

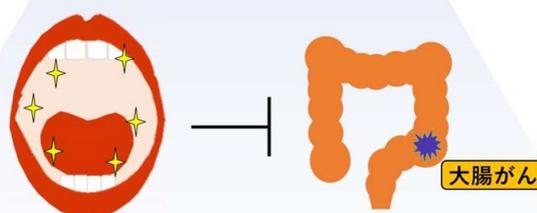
さらに、歯科治療や口腔ケアなどの歯科的介入や食事による口腔細菌叢の管理により大腸細菌叢をコントロールすることが可能か、大腸がん予防につながる方法について研究をすすめていく方針です。

今後の展望

唾液を用いた細菌叢解析による大腸がん診断およびリスク診断法を確立する。



・ 歯科介入によって 口腔細菌叢の改善
↓
腸内細菌叢のコントロール
↓
大腸がん予防、進行の抑制



【原著論文情報】

<タイトル>

Colorectal Cancer Patients Have Four Specific Bacterial Species in Oral and Gut Microbiota in Common—A Metagenomic Comparison with Healthy Subjects

<著者名>

Yoshinori Uchino, Yuichi Goto, Yusuke Konishi, Kan Tanabe, Hiroko Toda, Masumi Wada, Yoshiaki Kita, Mahiro Beppu, Shinichiro Mori, Hiroshi Hijioka, Takao Otsuka, Shoji Natsugoe, Eiji Hara and Tsuyoshi Sugiura

<雑誌> *Cancers* **2021**, 13(13), 3332

【問合せ先】

(研究内容に関すること)

杉浦 剛 教授

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

顎顔面疾患制御学分野

TEL 099-275-6232

E-mail sugiura@dent.kagoshima-u.ac.jp

(報道・広報に関すること)

鹿児島大学医歯学総合研究科等総務課総務係

TEL 099-275-6015

E-mail isgsoumu@kuas.kagoshima-u.ac.jp

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、取材は可能な限りオンラインでの実施をお願いいたします。

対面での取材を実施される際は、基本的な感染防止策、特に感染防止の3つの基本（人と人との距離の確保、マスクの着用、手洗い）や「3密」（密集、密接、密閉）の回避等を徹底していただきますようお願いいたします。
